

シンポジウム「私の卒業研究を振りかえって～大学で学ぶということ～」

- 卒業論文タイトル
「罪を犯した知的障がい者の現状と出所後支援のありかた—本当のセーフティネットとは—」
- このテーマを選んだ動機・理由
実習先での出来事
『累犯障害者』
メディアでの報道のイメージと現状のギャップ
- 卒論で主張したかったこと
知的障がい者による本当の犯罪の現状
なぜ罪を繰り返すのか→福祉に結びついていないケースが多い
地域福祉が重要視される中で出所後どのような生活が大切になるのか
- 卒論作成における苦労
情報、データを集めることの難しさ
説明能力のなさ（表現力、ボキャブラリーのなさ）
なんといっても孤独、逃げだしたくなること
→社福の友達と励ましあう、卒業旅行の妄想
- 卒論を書き上げての感想
とりあえずは解放感→卒業へと一歩
4年間の勉強の差が論文に出るということ
けれども、なんといっても自分のベストを尽くした、という思い
- 大学4年間の学びを振り返って
学校での勉強面
サークル、ボランティア、遊び・・・すべてが学び

中川 義博

今回、卒業論文に書いたのは「罪を犯した知的障がい者の罪状と出所後支援」ということで、実際に罪を犯した知的障がい者の人たちが、出所後、どういう生活をしていて、どのように支援していくか。セーフティネットという経済用語で使われる言葉ですが、あえてセーフティネットという言葉を使って、出所後支援の時に、福祉につながらない人たちに、どうやって支援していくかを考えていきました。

このテーマを選んだ理由として実習先での出来事、大学3回生に実習したんですけど、その時に、実習先にいた高校3年生の子が実習中に家に帰っている時に、警察で補導されたということで、話を聴いたら自転車を盗んだということでした。その時に感じたのは、語弊があるかもしれませんが、知的障がい者ということと、事件ということが密接に、一步、他の人に比べると近いのかなということを感じました。

その後たまたま本屋さんで見つけたのは『累犯障害者』という本で、山本譲司という方が書いた本ですが、実際にこの人は獄中で刑務所の生活を見てきた中で、刑務所中でいかに知的障がい者が多いかということを社会に知らせるということで、なかなか刑務所の中の情報が入ってこないの、わからないのですが、その本を読んで、刑務所の実態であったり、やはりいかに知的障がい者が多いかということを、すごく考えさせられました。

メディアでの報道のイメージと現状について。報道される内容は殺人事件とか凶悪事件がクローズアップされて、知的障がい者の犯罪というのは凶悪犯罪が多いというイメージがあったと思いますが、実際に調べていく中で、知的障がいがある、なしにかかわらず、犯罪率は変わらないということで実際のイメージとギャップがあることを感じました。この3つのことからこのテーマを選んで卒論を書いていきました。

卒論で主張したかったこと。知的障がい者による犯罪の現状。実際の犯罪はどのような罪で警察に逮捕されて刑務所に入っているか。現状を調べていくと、知的障がいがある、なしにかかわらず、差がないことが一つ主張したかったことです。その次に伝えたかったのは、なぜ罪を繰り返すのか。知的障がい者の場合は累犯性が強く、刑務所の入所度数が10回以上の方が多かったのですが、なぜそれだけ罪を繰り返すのか。その中で福祉に結びついていないケースが多いことが、調べていく中で、実際に資料を読む中で明らかになって、なぜ福祉に結びつかないのかを模索していくことを主張したいと思いました。

3つ目に、地域福祉が重要視される中で、出所後、どのようなことが大切になるか。また罪を繰り返して刑務所に戻るという生活が、あたりまえになってしまっていることが問題だと思ったので、出所後、どのような生活が大切なのかを考えていきました。

卒論作成の苦勞。情報とデータを集めることの難しさ。最初はテーマを決めてから実際に資料を探すわけですが、資料を探すことが難しく、1日かかって集めるということを最初の頃は繰り返して、資料を集めるだけで満足していたということでした。そこから先、文章を書けるのかなという不安はありました。論文を書きはじめると、説明能力のなさということで、自分が言いたいことを、どのように表現したらいいのかわからない、自分の言葉のボキャブラリーのなさを感じました。なによりも一番感じたことは孤独というか、一人でパソコンに向かい合って論文を書いているので、自分でいっていることがわかっていても、回りに伝わっているのか、こんなんでいいのかなということを感じました。そう思う時に社会福祉の友だちが大学に来ていたり、同じように卒業旅行の妄想などしたりして乗り越えられたかなと思います。

一応、卒論を書き上げての感想。今は解放感に浸っているなという思いがあります。卒論を出せば、うちの学科は卒業へと進めるということで、もうすぐ卒業というのを感じています。書き上げてから思ったこと。他の人の卒論を読ませてもらうと、4年間、真面目にやってきた人との差がすごいあるというか、僕は真面目にやっていなかった方なので、他のゼミの人の論文を見せてもらって、4年間の勉強の差は論文に出るもんやな、ということを感じました。ただ自分自身はベストを尽くしたなという思いはあります。最後の12月、何とかしていいものを書きたいなという思いと、先生に少しでも認められたいという気持ちがあったので、そのあたりで自分のベストは尽くせたかなという思いはあります。

大学4年間の学びを振り返って。学校での勉強面。皆さんは1回生ですから、春学期にレポート、試験を受けて、秋学期、レポートと試験があると思いますが、僕もレポートと試験だけ乗り越えることだけを考えて授業を受けていたんですが、その分、本を読んで真面目にやっていた人たちは本を読んだ差とか、論文に差も出ると思ったので、メリハリをつけて勉強しないといけないなと、その分では後悔している思いもあります。ただ僕が思うのは、大学4年間は勉強だけではないと思います。サークル、福祉学科ということで、ボランティアに携わっている人もいると思います。何よりもせつかく時間がある以上、遊びも大事だと思います。どれをとって学びだと思っています。サークルでも上下関係はあると思いますし、その中で学んでいくこと、マナーとか学んでいくチャンスは、どの場面でもあると思いますので、学校での勉強は大事だと思いますが、社会に出る直前の期間として、勉強以外の面で学ぶことも大学かなと。僕は勉強をあまりせずにサークル、ボランティア、遊びに大事だったなという思いがあるので、すべてが学びになるということを、今、思えば、感じます。

皆さん、1回生ですからサークルとかあまり真剣でないかもしれませんが、2回生以降、何か自分でやりたいことを見つめて一生懸命やることも大事なと思うので、ぜひチャレンジしてほしいなと思います。以上で終わりたいと思います。

罪を犯した知的障がい者の現状と出所後支援のありかた

—本当のセーフティネットとは—

19062056

中川 義博

<キーワード> 「知的障がい者」「出所後支援」「地域生活」

<梗概>

近年、軽微な罪を繰り返し刑務所に戻ってくる知的障がい者の存在が明るみになってきた。その方々はこれまで福祉に結びつくこともなく、またどこかで福祉からも無視されてきたように思う。しかし、「地域生活定着支援センター」を各都道府県に設置することとなり、このセンターが「司法」と「福祉」の連携の中心的な機能を担い、出所した知的障がい者が行き着く「地域」での生活をサポートしていくことが決定した。

本論では、まず知的障がいという定義をもう一度考察しながら、罪を犯した知的障がい者の現状などに触れていく。そして、出所後地域で生活するにあたっての現在の問題、また福祉行政の問題などを考察したい。そのことを通して、「刑務所の暮らしの方が良い」と何度も罪を繰り返す知的障がい者にとって、地域で生活するためのセーフティネットとはどのようなものなのか、センターの役割を踏まえつつ私なりの意見を考察したい。

<目次>

序章

第1章 知的障がいの定義と犯罪の現状

第1節 知的障がいの定義と知能指数

第2節 逮捕から刑務所出所までの流れ

第3節 知的障がいのある新受刑者の現状

第2章 現在の刑務所出所後支援

第1節 現在の出所後支援

第2節 出所後支援の1つの流れ—更生保護施設の役割—

第3節 出所後支援における福祉の課題点

第3章 オーストラリア・ビクトリア州での支援

第1節 現状と支援

第2節 支援の分析と日本の支援との比較

第4章 日本での今後の支援

第1節 日本における地域生活定着支援センターの設置

第2節 地域で暮らすためのセーフティネットとは

終章